

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 86 号 平成 29 年 7 月 20 日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



ごうしょうしんべい みなと さきがけ

『豪商神兵 湊の魁』より「放香堂」の店頭の様子

「宇治製銘茶」と「印度産加琲」の看板が掲げられている

神戸とコーヒー

コーヒーは江戸時代にオランダ人を通じて国内に持ち込まれ、ごく限られた人々の飲み物でした。正式な輸入は明治に入ってからでしたが、神戸では、開港後、居留地の外国人によって早くからコーヒーが飲用されていました。

神戸で最初にコーヒーを販売したのは、元町三丁目の茶商「放香堂」です。放香堂は明治七年（一八七四）開業で主に宇治茶の販売をおこなっていました。明治十一年（一八七八）よりコーヒーの販売も始めました。同年十二月二十六日付の読売新聞に、広告を出しています。そこには、「焦製飲料コフイー 弊店にて御飲用或ハ粉にて御求共に御自由」と書かれており、「コーヒーを飲用と粉で販売していたことがわかります。」

日本で初めての喫茶店は、明治二十一年（一八八八）に開店した東京の「可否茶館」といわれていますが、新聞広告にあるように放香堂の店頭でコーヒーが飲めたのであれば、それより十年も前に、日本初の喫茶店が神戸に誕生していたということになります。

神戸・阪神「名所」の旅―江戸時代の絵図と歩く 大国正美（神戸新聞総合出版センター）

江戸時代に描かれた『撰津名所図会』などの挿画のうち、神戸・阪神間を対象に当時の風景や人々の暮らしを描いたものを読み解いている。挿画は描かれた主題によって街道と景観・史蹟と旧跡・社寺・なりわいと娯楽といった章に分けられ、興味があるところから読むことができる。神戸市内では、有馬温泉を筆頭に、布引の滝、箱木千年家など有名な観光地や、生田神社、須磨寺といった社寺も多数取り上げられている。巻頭には地図が載っていて、現在の風景と見比べてみるのも楽しい。



開港と近代化する神戸 神戸外国人居留地研究会編（神戸新聞総合出版センター）

「神戸外国人居留地研究会」が設立二十年の節目に開港一五〇年を記念して、神戸の歴史を彩った事象の研究・調査をまとめた一冊。J・W・ハートをはじめとする居留地にゆかりのある外国人、神田孝平や金子直吉ら日本人の活動、かつて神戸にあったオリブ園などその研究範囲は多岐にわたる。十二編の論文と六編のエッセイやインタビューで神戸の歴史に新しい光を当てる。

神戸市史紀要「神戸の歴史」第26号 神戸市（文書館）編集・発行

昭和十五年、杉原千畝ビザにより迫害から逃れたユダヤ難民の多くが神戸に滞在した。僅かに残る文書や市民提供の写真・証言から彼らの足跡が明らかにされる。

他に、ロシア革命で避難した子供達を救った勝田銀次郎と陽明丸トルコ軍艦エルトゥール号遭難者支援など神戸と難民をテーマとした論文を収録。窮状にある外国人に手を差し伸べてきた神戸の人々の姿を見ることが出来る。

みなと 港都神戸を造った男―《怪商》関戸由義の生涯 松田裕之（風詠社）

黎明期の神戸に彗星のごとく現れ、貿易行政や市街造成に辣腕を振るった関戸由義。栄町通の整備事業を行い都市整備の先覚と言われながら、彼については語られることも少なく、実像は謎に包まれていた。

著者は史料を丹念に辿り、その半生を描き出す。激動の時代に、開港場となった神戸を舞台に、自身の才覚を頼みに生き抜いた、一人の男の物語である。

神戸っ子の応接間―川瀬喜代子と神戸にしむら珈琲店 日野嗣士（アートヴィレッジ）

昭和二十三年、わずかに六席の喫茶店が神戸の中山手に誕生した。この地で味と接客を追求し続けた川瀬氏の足跡を辿る。彼女は酒用の宮水でコーヒーを淹れて人々の舌をうならせ、従業員と共に実践した「大切な人を自宅にお招きしたおもてなし」で人々を魅了した。神戸はおろか全国にまでファンを持つ店になる源は、彼女自身が大切に思うものを守り続けたから。その真摯な半生を描きだす一冊。



KOBEBE 西区 こんなまち 大海一雄（神戸新聞総合出版センター）

かつて旧明石郡に属し、昭和五十七年に垂水区から分離して誕生した西区。「ニュータウンは歴史がないので面白くない」と言われたのを機に、著者は西神ニュータウンの歴史研究会を始める。本書では、西区を語る上で欠かせない垂水区、須磨区、隣接の明石、三木にも範囲を広げ、西区の空白の歴史の断片を拾い集めた。太古の昔から昭和後期までの通史、社寺、ゆかりの人物がまとめられ、西区の調べ物に力を発揮してくれる。「『はせ谷』か『はせ谷』か」や「地下鉄に快速があった」など気になるトピックスも盛り沢山。

屋根をかける人 門井慶喜 (K A D O K A W A)

建築家として知られるウィリアム・メレル・ヴォーリズ。明治終わりから大正、昭和の激動の時代を生きた彼の生涯を描く小説。

ヴォーリズは、明治三十八年、キリスト教伝道を目的に、近江八幡の商業学校の英語教師として来日。後に建築家として成功する一方、家庭医薬品で馴染みのあるメソソレータムの近江兄弟社を設立して「青い目の近江商人」とも呼ばれた。

彼の建築物は全国に及び、神戸の旧ユニオン教会（現フロインドリーブ本社）など、今も暮らしの中で生き続けている。信仰者として人々の幸せを願い続けた彼の思いとともに。



旧グッゲンハイム邸物語 森本アリ (ぴあ関西支社)

神戸市垂水区の海沿いにある小さな町、塩屋。この町の旧グッゲンハイム邸の管理人が紹介する本書には、塩屋の町の魅力、古い建物と音楽への愛情が詰まっている。

町がもつ特徴を他にはない魅力と捉え、活かそうと考える著者が行う、町全体を巻き込んだ「まちづくり」は興味深い。建築家の島田陽氏、音楽家の二階堂和美氏との対談も読み応えがある。ふらりと塩屋を訪ねてみたくなる。

チーズ・イン・コーベ 最果タヒ (Sunborn)

ある街の匂いに触れる写真文芸叢書「マチビト」の第一弾。神戸出身の詩人・小説家である著者の短編小説を写真家の松本直也が切り取った神戸の日常風景が彩る。

神戸から上京してきたユキと、顔はかわいいが性格の悪い東京生まれのまゆちゃん。大学の入学式での縁のまま、なんとなく友達でいる二人だが、盆の帰省について行きたいと言いつ出したまゆちゃんにユキは複雑な思いを抱く。本の後半に英訳版あり。

II その他の新刊 II

鈴木商店と台湾―樟脳・砂糖をめぐる人と事業 齋藤尚文 (晃洋書房)
初期「Viking」復刻版第一巻 (第三巻 (三人社))

22歳が見た、聞いた、考えた「被災者のニーズ」と「居住の権利」―借上復興住宅・問題 市川英恵 (クリエイツかもがわ)
はじめましてカバです―川上博司追悼集 (川上すみ子)

神戸 その⑩ あんな人こんな人

J・マーシャル John Marshall
天保4年 (1833) ~ 明治20年 (1887)



マーシャルの築港計画図 『神戸市史別録二 付図』

J.マーシャルは、イギリス南東部出身で、明治3年 (1870) 横浜に来航、オーストラリアで港長を務めた経歴を買われ、明治4年 (1871) に神戸港の初代港長として、兵庫県に雇用されました。

雇用後、港内の測量・調査と港則の立案を依頼されたマーシャルは、港の潮流等を測量し、明治6年 (1873) 10月に築港計画案を兵庫県に提出しました。

この案は、県令神田孝平から大蔵省に提出されましたが、承認にはいたりませんでした。しかしながら、彼の築港計画が神戸港近代化の口火となり、後の築港工事の原案として重要な役割を果たしました。また、マーシャルは船舶の安全な航行に気象観測の必要性を理解し、気象観測器をイギリスから購入し、明治8年 (1875) から海岸通の港務所において、毎朝9時に気圧、気温、風位、風力、天候を観測し記録におさめました。これは神戸の気象観測の礎を築くものとなりました。

1876年 (明治9年) に神戸港長の職を辞し、その後亡くなるまで神戸港務局顧問として働き続けたマーシャルは、神戸港の安全が守られることを最後まで願っていました。

参考：『外国人居留地と神戸』田井玲子 (神戸新聞総合出版センター2013) 『神戸開港三十年史』 (開港三十年記念会1898) 他

十八番のシム

夏の風物詩であるラムネ。かつて十八番と呼ばれ親しまれていたことがあるのをご存じでしょうか。

ラムネが日本に初めて持ち込まれたのは、嘉永六年、ペリーが浦賀に來航したときだといわれています。国内初の製造販売は、長崎や横浜など諸説ありますが、少なくとも関西においては、神戸外国人居留地のシムが、最も早くラムネの製造販売を行った人物であるようです。

A・C・シム (Alexander Cameron Sim) はスコットランド生まれで明治三年に來日し、長崎居留地で薬局を開きますが、すぐに神戸に転じます。神戸居留地では薬種商レウエリン商会に薬剤師として勤務し、その後事業を引き継ぎ、シム商会を設立しました。主に医薬品を輸入販売し、香水、石鹸なども売っていたようですが、副業として始めたラムネ製造が有名になりました。『日本清涼飲料史』によると、シム商会がラムネの製造販売を本格的に開始したのは明

治十七年頃とされています。それからわずか数年の間に、ラムネは庶民の飲み物として急速な普及をみせます。英国製の瓶に詰められたラムネのハイカラさが受けたことはもちろん、これにはコレラの流行も関係していました。

神戸における最初のコレラ流行は明治十年でした。以降、毎年のように患者を出し、その死亡率も非常に高いものでした。神戸の水道創設は明治三十三年とまだ先の話ですから、当時の人々は飲料水を、不衛生な井戸水に頼らざるを得ませんでした。

甚大な被害となった明治十九年夏のコレラ大流行では、神戸でも二千人近い死者が出ました。そんな折、『東京横浜新聞』に、ガスを含有する飲料を飲むとコレラ病にならないという記事が掲載されたことでラムネの売れ行きが伸びたといえます。同年七月二十日の『大阪日報』には「ラムネ払底コレラ流行のお蔭」の見出しで「神戸十八番館にて製造する同品は昨今既に払底を告げたるに付盛んに製造し居るも其の注文高の十分の一にも足らざる程なり」と記され、生産が追い付かないほど、人々が飲料水としてラムネを求めた

様子が窺えます。とりわけシムのラムネが売れたのは、他の業者よりその味と品質が優れていると評判だったためです。シム商会が居留地十八番にあつたので十八番の商号をラベルに附したことから「十八番」は優良ラムネの代名詞ともなりました。

関西では多く模造品が出回るほど、粗悪品に十八番のラベルを偽造貼付するだけで、ダース十五銭程度のラムネが四、五十銭で売れたそうです。

ところでシムは、居留地の消防隊長としての活躍でも知られています。当時居留地は、ホテルなどの建物や倉庫の火事が多発していました。そこで居留地住民が自衛のため、米・英二隊の義勇消防隊を結成し、その

英国隊長をシムが務めたのです。

るよう準備し、ほとんどの火災に出席したといえます。防火用井戸の設置などにも尽力し、これらの功績により、居留地返還後も居留地内において市の消防組を指揮する権限を与えられました。

その他にもシムは、陸上競技やボート競技などのスポーツ選手としても有名で、彼の提唱で設立された神戸レガッタ&アスレチッククラブは西洋発祥のスポーツを神戸から全国へ広める役割を果たしました。加えて、明治二十四年の濃尾大地震や明治二十九年の三陸大津波などの自然災害時に義援金を集め現地に赴くなど、災害ボランティアの先駆けともいえる活動も行いました。

明治三十三年に腸チフスで亡くなった翌年、外国人と日本人双方の友人らが彼の社会的貢献を讃えて建立した記念碑は、今も東遊園地の一角にひっそりと佇みます。



東遊園地内のシムの記念碑

参考文献 『神戸財界開拓者伝』『神戸市伝染病史』『使徒たちよ眠れ』『神戸居留地史話』他



『居留地計画図』1870年(部分)

英国隊長をシムが務めたのです。十八番のシム商会から明石町筋をはさんだ西側に公園があり、その東隅に火の見櫓がありました。シムは日夜櫓に登って見張りに努めました。就寝時には枕元に消防服とヘルメットを置き、出火時に一番に駆けつけられ